核データニュース，No.27 (1987)

核データニュース発行20周年に当って

原研　五十嵐　信　一

「前号掲載の4先輩の寄稿文が大変好評だったので，本号をニュース発行20周年記念特別号続編とし，今度は若い人に書いてもらうことにしたから，何か書くように」との依頼を受けたが，そもそも好評物の続編に物を書くなどはどう考えたって割が悪い。しかも編集委員会からの執筆依頼は12月24日付で，締切りは1月10日となっているから，正月休中に書けと言うことである。年末年始のどさくさに書く物などに良い物の出来る筈がない。どうせまとまりのない物になるのは分りきっているが，断りようもないから，目をつぶって書くことにした。

シグマ委員会の議論の中でも核データニュースに関する議論はその回数においては上位を占める位に多いように思う。この種の議論はその性格上，決っして華々しいものではないが，核データ活動の普及向上のための媒体としての役割を，委員諸氏が大変重視され，また期待されていることを示している。これを受けて，何んとかより良いニュースを出そうとされてきた編集担当諸氏の御苦労はまた大変なものであった。いつも側で見てきた私などは，この特別号には歴代編集者の苦労話や裏話を集めた編集奮闘記のようなものを載せる方が，私の駄文などを載せるよりもはるかに有意義ではないかと思っている。

さて，ニュースの番1号が昭和41年3月に発行され，本号で通巻63号になる。号数では還暦を過ているが，年数では成人式を終えたばかりと言った所で，最近漸く編集体制が固り，ニュース発行が軌道に乗ってきたように思われる。ここに至るまでには多くの試行錯誤があり，それらを乗り越え乗り越えして，やっと発展の方向を見つけた，と言って良い。この試行錯誤の過程は表紙の色の変遷に象徴されている。

創刊号から26号までは「JNDCニュース」の表題がついた橙色の表紙であったが，27号からは気分一新をはかって青色に変った。初めの頃は紙質が粗末で，内容もどちらかと言うと，外国の文献紹介的な記事が多く，年4回の刊行はほぼ定常的に行われていたが，もっと国内研究活動の速報のようなものにすべきである，と言った議論がしばしば行われた。しかし，幼少年期のシグマ委員会活動を世に紹介し，核データの利用・普及のためには大いに貢献したと言える。

名称が「核データニュース」になったのは昭和51年の通巻37号からである。表紙の裏面には，英文で，このニュースを発行する主旨が説明してあり，外国をも意識に入れて，より広い核データの情報流通誌たらん，とする意気込みを感じさせる。この頃，日本原子力学会の年会，分科会では「核データ・炉物理合同会合」が行われるようになり，核データ活動がシグマ委員会内に止まらず，広く外に向って飛躍しようとしていた時期であった。また，JENDL－1の評価，編集も丁度この時期に行われており，これらを伝える藤色表紙の「核データニュース」は希望に胸ふくらます青年期

を迎えていたと言った所であった。

JENDL−1からJENDL−2への発展，崩壊熱評価用ライブラリーの作成，核構造・崩壊データ評価活動への参加など，日本の核データ活動が世界的に注目されるようになってくると，国内の核データ研究の成果が発表出来るような学術誌的役割を核データニュースに期待出来ないか，と言った議論が行われるようになった。通常の学術誌では，例えば，膨大な量の測定データの数値表を掲載する余裕がないので，折角のデータが生かされない。これを生かす媒体として核データニュースを利用する道を考えられないか，と言うのである。これは非常に重要な問題であるが，ニュース編集上にはいろいろの困難がある。今日においても未だ解決してはいないが，核データニュースのあり方を考えさせるテーマである。シグマ委員会では議論の末，妥協案を作った。シグマ委員会の活動を日本原子力学会誌に報告している，いわゆる2年報の昭和54，55年度報告（同誌24巻2号36頁（1982））には「より広く核データに関する情報を流通させる一助として，年3〜4回「核データニュス」の発行を続けている。最近核データの便利な発表の場としての雑誌がほしいと言った声がしばしば聞かれるようになり，その要望に一部応えるために，投稿を受けた場合には，それらを未公開扱いで「核データニュース」に掲載することにした」とある。これは前記の問題を含めて，何んとか現実的解決方法を見出そうとした編集者の努力を物語るものであるが，現実は，核データセンターの入手不足などもあって，昭和56〜59年には年間発行回数2回がやっとと言う状態になり，折角の企画が生かされたとは言い難い状況になった。核データニュースにとっては大きな試練の時期であった。

この事態を打開するために，シグマ委員会では昭和59年に「核データニュースに関する検討小委員会」を設け，新たに「核データニュース発行のための編集委員会」を置き，発行回数も無理のない年3回とし，核データの情報流通・交換の役割のみならず，技術論文等の投稿も積極的に掲載することにし，テクニカルコメント欄を新設するなどを決めた。昭和60年度からこの体制で編集が行われることになり，表紙も本号のようなウグイス色に変った。こうして20周年を迎えた今後の核データニュースに期待する事の1つに日本の核データ活動を世界に紹介する役割を果すことがある。これを次の成長への懸案として是非検討して欲しいと思う。編集委員諸氏の御健闘を祈ります。